日吉台地下壕保存の会会報
第９３号
日吉台地下壕保存の会

第13回戦争遺跡保存全国シンポジウム松本大会 今年も成功裡に終了

第１３回戦争遺跡保存全国シンポジウム松本大会は、２００９年８月７日から１０日まで長野県松本市郊外の松本第一高校を会場に、沖縄から北海道まで全国から約２６０名の参加のもとに行われました。

○８月７日（金）
プレフィールドワーク

大会に先立って諏訪鉱山、平岡ダム、木曽発電所などを巡るフィールドワークが行われました。また日吉台地下壕保存の会は独自に松本にある「きけわだつみのこえ」の巻頭を飾る慶応義塾出身の特攻兵上原良治ゆかりの墓地、生家、出身校などを訪ねるフィールドワークを行い、彼の故郷への想いを偲びました。

○８月８日（土）
戦争遺跡保存
全国ネットワーク会員総会

正午から戦争遺跡保存全国ネットワーク会員総会が行われ、０８年度の活動や０９年度の活動の方向性について話し合われました。全国の戦争遺跡の文化財指定状況では、府中市の白糸台掩体壕を始め昨年度より１５件増の１６１件が指定登録されていることが報告されました。人事では島村晋次事務局長が体調不良のため、松代大本営の保存をすすめる会から阿藤満政氏が就任されました。

○全体会

１時より全体会が始まり、開会行事では主催者代表、歓迎挨拶のあと菅谷昭松本市長も来賓として挨拶されました。記念講演では、元朝日新聞論説主幹の中馬清福信濃毎日新聞社主筆が「戦跡から見えてくる戦争と平和」というテーマで講演されました。その後、中国の陳俊英湛江師範大学日本研究所副所長により「中国河北省の戦争遺跡」というテーマで特別講演が行われ、十菱駿武代表により「戦争遺跡保存運動の現状と課題」というテーマで基調報告が行われました。また地域報告として「松本市の戦争遺跡」平川豊志（松本強制労働調査団）「登戸からの報告」渡辺賢二（旧登戸研究所の保存を求める川崎市民の会）が行われ、本会からも「日吉からの報告」として山田仁和・新井揆博両氏により、航空本部等地下壕の発掘について報告が行われました。

中馬清福氏
信濃毎日新聞社主筆

「戦争遺跡は平和の語り部」

第13回戦争遺跡保存全国シンポジウムは8日、松本市で3日間の日程で開幕した。全国各地で戦争遺跡の保存や調査を進める市民団体などの約200人が出席。シンポなどを通じて各地の取り組み、課題などについて意見交換したり、保存の意義などを対外的にアピールしたりする。

松本　全国シンポ開幕

戦跡から見えてくる

各地の取り組みなどが報告されている第13回戦争遺跡保存全国シンポジウム

保存の意義 アピール

戦争遺跡保存全国ネットワーク（長野市）や松本強制労働調査団（松本市）などでつくる実行委が主催。委員長の荒地良彦さん（64）は、戦争遺跡の保存によって「平和の大切さを後世に伝え運動を続けていきたい」とあいさつした。

同ネットワークは、陸軍参謀本部の十菱駿武さん（64）は長野県内に2008年、陸・海軍施設・軍用地があった「北の大本営」と呼ばれる施設が、札幌市教委に保存を強いていたのを解体されたと説明。「保存法制は民間団体などに期待」と強調した。また、戦争を経験した70歳以上の人口が全体の4割近くになったことを「戦争遺跡は証拠の物証、平和の語り部」と述べ、保存していく意義を強く訴えた。

会場の松本第一高校は、中国・公強制労働させられた中国人捕虜の平和ダムや、横須賀の日吉地下壕などの戦争遺跡を紹介するパネル展も開いている。8日午前10時から「戦争知ってる社会がある」ほか、「平和のための戦争遺跡を次世代へ」と題し、戦争遺跡を活用しながら保存し、「戦争遺跡は生かし、活用していく」との大会アピールを採択する。

'09.8.9 信濃毎日

信濃毎日新聞 2009.8.9

全体会終了後、浅間温泉「ホテル井筒」において交流・親睦会が行われ、全国の戦争遺跡保存運動の仲間たちが親交を深めました。

○８月９日（日）　分科会

１．「保存運動の現状と課題」
２．「調査方法と保存整備の技術」
３．「平和博物館と次世代への継承」
４．「特別分科会」（中国人強制連行）

終了後　全体会　分科会報告　集会アピール

○８月１０日（月）フィールドワーク

松本市の戦争遺跡（５０連隊赤レンガ建物、里山辺地下壕、中山半地下工場跡、陸軍松本飛行場跡、松本憲兵隊長官舎、銃剣道場跡、陸軍墓地）

○各分科会からの報告

第１分科会報告「保存運動の現状と課題」（谷藤）

第１分科会は７本の発表がありました。会を代表して新井・谷藤が司会・進行を行いました。

①「沖縄県内の指定戦争遺跡について」沖縄平和ネットワーク（大田玲子氏）
②「岩手における戦争遺跡の保存と取り組み」岩手戦争を記録する会（加藤昭雄氏）
③「陸軍伊那飛行場の研究と遺跡の保存活用」上伊那郷土研究会（久保田誼氏）
④「旧北部軍管区司令部作戦室保存運動について」札幌郷土を掘る会（林恒子氏）
⑤「横須賀米軍基地内近代遺産紹介」貝山地下壕保存する会準備会（原田弓子氏）
⑥「松代大本営地下壕の調査・研究とガイド活動」松代大本営の保存をすすめる会（北原高子・小林ゆき江氏）
⑦「陸軍登戸研究所の保存運動のこれまでの活動と残された最後の木造建物の保存をめぐ

る課題」登戸研究所保存の会（今野淳子氏）

第１分科会の発表

どの発表もそれぞれの地域に根ざした地道な研究で、しかも一定以上の年月をかけて取り組まれたものでした。はるばる北海道から来られた「札幌郷土を掘る会」は自衛隊の基地内にある「北の大本営」と言われた「旧北部軍管区司令部作戦室」が残念ながら取り壊されていく過程となお且つ今後ともこれを後世に伝えるための市民の取り組みを報告されました。「貝山地下壕保存する会準備会」の報告は横須賀米軍基地内に集中する戦争遺跡の所在についての報告でした。明治大学生田キャンパスにある「陸軍登戸研究所保存の会」からは来年の３月の資料館開館に至る過程について報告されました。０６年の市民運動発足からわずか３年で大きな進展の見られた登戸の動向と会発足から２０年に及ぶ日吉の動向と比較せずにはいられませんでした。

国（自衛隊基地）、米軍基地、大学、民有地と戦争遺跡の所在する地権者の意向によっても戦争遺跡の保存に向けた状況が全く異なるということを考えさせられた分科会でした。

○第２分科会「調査の方法と保存整備の技術」（亀岡）

第２分科会は、今回は４分科会の中で最多の９本の報告がなされました。数年前までは、もっとも報告数が少なく、第２分科会なくなりはしないか、と心配していた者にとっては、夢のようです。この分科会はもっとも専門性が高いので、誰でも、どんな内容でも、という訳にはいかないからです。

今年の報告は次のようなものです。

「京都師団の戦後処理―埋納された戦後記録―」小林史晃・「占領と大量虐殺における空間的脈絡の変容―済州島の事例として―」高　誠晩・「鹿児島県における旧軍飛行場の遺跡（５）」村上康蔵・「小丸太づくりの滑走路―高知の山あいの海軍特攻飛行場」藤原義一・「旧百里原海軍飛行場掩体壕の発掘調査」小玉秀成・「亀島山地下工場実測のとりくみ」村田秀石・「軍神像の発掘」清水啓介・「慶応日吉キャンパスの軍令部第三部・航空本部等地下壕の発掘について」山田仁和・「日吉の空襲に関する実態報告書」茂呂秀宏

日吉からは山田さんと茂呂さんが報告し、それぞれ高い関心をあつめました。とくに昨年秋発掘された地下壕については、壕の入口周辺が無傷の状態で発掘され、またこのような場で報告されたのは、初めてのことなので、パワーポイントで映し出される写真を、参加者全員が熱心に見つめていました。茂呂さんの昨年に続いての空襲実地調査は、ともすれば、アメリカの爆撃調査報告が主流である空襲調査に、一石を投じるものとして、評価されています。

これだけ質の高く、多方面からの報告が増えたということは、戦争遺跡研究が学問としても高められており、それは保存と活用をより促進し、社会的役割をになう基盤を作るものだと思われます。感情論ではなく、論理と事実の裏づけがあってはじめて戦争遺跡が人の心に訴える力を持つ、ということは、私たちは日々の活動からじゅうぶん学んでいることでもあります。

○第２分科会の日吉台地下壕保存の会からの報告（茂呂）

日吉台地下壕保存の会から第２分科会に出された２本のレポートを詳しく報告します。

一つは、会員の山田仁和・新井揆博からの**「慶応日吉キャンパスの軍令部第３部・航空本部など地下壕の発掘について」**という報告でした。山田からは慶応義塾大学民族学考古学研究室が調査主体になった発掘調査の全体的経過と本調査の最大成果であるこの地下壕入口の出入り口部分の上屋を持った馬蹄形の大規模な構造物について主要に報告がなされました。こ

の様な構造物は全国で初めて発掘されたものであり、上屋の様な構造物は全国で初めて発掘されたものであり、上屋が爆風避けや出入り口の隠蔽などの目的をもって作られていたことを初めに，発掘された構造物が私たちに何を語ってくれるのか今後の大きな研究課題が投げかけられました。新井からは、上記発掘調査直後に日吉台地下壕保存の会と研究者ら20名の共同作業によるこの地下壕内部の現場調査の報告がなされました。地下壕保存の会の結成以後には入壕する機会はなく、実地調査から多くの知見を得貴重な体験になったこと、また、今後の問題としては継続調査や活用などの課題が投げかけられ、大学側との協議が大きな課題となりました。

山田仁和氏

もう一つのレポートは、会員の茂呂秀宏からの**「日吉の空襲に関する実態調査報告　日吉は戦場だった(2)」**というものです。

茂呂秀宏氏

(2)でお分かりのように、昨年にも同様なレポートがなされ議論となり、継続検討の課題が確認されたものでした。昨年、保存の会の空襲聞き取り調査からの「日吉の空襲は地下壕などの海軍軍事施設を対象にした空襲であった」という結論に対して、「地下壕をターゲットにするという米軍の文書はなく、他の地域を狙った余波に過ぎず、偶然的なものである」という反論が出され、結論としてさらなる米軍の資料研究と聞き取りなどの実証研究の深化が課題されたものです。今報告は、今年の１月から実施した地下壕保存の会と横浜の空襲を記録する会との合同研究会の研究成果を踏まえ出されたものです。結論的には、地下壕建設から出された残土・ずりを米軍は上空から認識しこの場所に何らかの大規模な地下構造物の建設を推測し、その動きに対する牽制と地域住民の不安と動揺厭戦気分を増長させる目的もった空襲だったのではないかなど四つの仮説を提起しました。また、実証的検証としては、投弾密度の問題提起と類焼の可能性の少ない農村を焼きつくすには意図的で相当高密度な爆弾投下の必要性、また、地下壕入口部分の集中的被害状況などの検証を総合して、意図的空襲であったとの提起をしました。議論としては今年も、米軍資料にはないものはターゲットになっていたとすべきでないとのとの意見が出され、昨年同様な議論の構図となってしまいました。司会から、今年米軍の 1944 年 11 月以後撮影した爆撃目標設定のための航空写真は公表されていないものも多くあり今後も調査を継続していく必要があるなどとのまとめも出され、今年も継続課題と言うことになりました。

○第３分科会「平和博物館と次世代への継承」　（石橋）

第３分科会は、松本第一高校４階のE４０５教室で行われ。参加者は延べで６０名というところ。毎年思うが、各団体の戦争遺跡ガイドの活動報告もこの分科会でされる方がいいように思う。

報告者と報告題は、沖縄平和ネットワークの津多則光さんの「沖縄戦ガマの真相」、戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会の福林徹さんの「丹波マンガン記念館２０年から何を学ぶか」、明治大学大学院院生の私、石橋による「大学の慰霊に関する戦争遺跡―明治大学を中心に―」、武蔵村山市立歴史民俗資料館の成迫政則さんの「陸軍少年飛行兵学校・資料館開設・『戦争の語り部』に！」、筑波大学の伊藤純郎さんと元院生のお２人の「戦争遺跡調査の課題－『茨城県の戦争遺跡』（平和文化）編集を通じて」、愛知教育大学の南守夫さんの「日本における戦争博物館の復活」、沖縄平和ネットワークの吉浜忍さんの「ガイド活動と南風原文化センター」、松

代大本営の保存をすすめる会の飯島春光さんの「いのちを受け継ぐ歴史教育」の８つ、報告者１０人である。

伊藤報告は教員とゼミ生が３年かけて茨城県内の戦争遺跡調査を行った記録で、GISとよばれるソフトも活用した調査方法には刺激を受けた。一方で、多くの人員を動員し、資料集積し、時間をかけて調査のできる環境は真似できず、うらやましい限りである。

福林報告の丹波マンガン記念館の閉館は平和資料館運動の難しさを示したと思う。成迫報告の武蔵村山市立少年飛行兵学校資料館の計画と、吉浜報告の移転拡張なった南風原文化センターの話は大きな吉報であった。南報告は靖国神社の遊就館の他、自衛隊関係の「資料館」の充実があり、日本で戦争博物館が復活し、多くの入館者を集めているという話は、靖国神社ガイドで遊就館を批判する者として、危機感を持ち、参考になった。

第３分科会　石橋星志氏

〇フィールドワーク

松本市の戦争遺跡（５０連隊赤レンガ建物、里山辺地下壕、中山半地下工場跡、跡、松本憲兵隊長官舎、銃剣道場跡、陸軍墓地）

信州大学構内５０連隊「糧秣庫」

松本憲兵隊長官舎

里山辺地下壕内部

陸軍松本飛行場格納庫土台部分

投稿

第13回戦争遺跡保存全国シンポジウム松本大会に参加して

山田　淑子

2009年8月8日から10日に掛けての戦争遺跡保存全国シンポジウムに参加しました。この大会への参加については日吉台地下壕保存の会でガイドを始めた夫のすすめでした。戦争遺跡の保存の必要性を理解していないときに、興味から日吉台地下壕の見学に参加して始めてその重要なことを認識しました。保存の会の主催する学習会等で勉強することにより戦争遺跡の保存について改めて考えていくようになり、今大会への参加につながりました。

各地からの報告は、日吉台の新しく見つかった軍令部第三部・航空本部等地下壕出入口の発掘を始めとして、旧百里原海軍航空隊掩体壕の発掘調査、いままで知らなかった韓国済州島の４・３事件、高知の山あいの編んだ小丸太を敷き詰めてつくった滑走路の隠し飛行場、愛知県の軍神像の発掘など興味深いものが次々に報告されぐんぐん引き込まれていきました。

また、登戸研究所の保存については、高校生が中心となり発掘し、保存の主体となり大きな保存運動へと発展していったことの報告で、地味な活動ではありますが丁寧に行なった若者たちの力量に感動を覚えました。軍神像の報告の中では発掘されている40件中19件が学校に建てられ戦中の軍国主義教育に活用されていたのは本当にショックでした。頭の柔らかい一番吸収しやすい子供時代に刷り込まれていった事実は恐るべきものです。戦後、像は破壊されたりしたもののその台座だけが残りその上に平和を意味するハトの像などが作られていることは本当に驚きです。教育の締め付けが始まっている時代ですが、この報告を聞いて身が引き締まる思いがしました。日吉の見学会でも多くの児童・生徒を受け入れているそうですが、そのひとり一人に戦争の意味を戦争遺跡を見ることで実感・追体験してもらうことはとても重要なことであると思います。

戦争を語る人たちも高齢化し、戦争そのものが風化しそうな、またさせられそうな時代ですが、戦争遺跡の保存が確実なものになり、これを活用することにより、いつまでも戦争とは何であるのかを実感し想像できることが大切であると考えさせられました。日本各地至るところに戦争の跡が残っています。しかし、これを後世に伝えるのは大変重要な仕事であり、私達に課せられた重い役目だと思います。このことの大切さを十分に理解し学習することができた大会でした。今年の夏はいつもの夏より戦争を深く考え、自分の身に引き寄せることができたのではないかと思いました。

2009年8月14日

報告

安曇野に特攻隊員上原良司を訪ねて

運営委員　亀岡敦子

８月７日午前１１時３０分、松本駅に集合した日吉台地下壕保存の会のメンバー６名（新井・石橋・岩崎・喜田・谷藤・亀岡）は、「戦争遺跡保存全国シンポジウム松本大会」と書かれた大きな横断幕と、４年前開かれた「上原良司といまを生きる」の会の西村・臼井・丸山・田内さんの出迎えを受けた。明日からの全国大会に先がけて、『きけわだつみのこえ』の巻頭をかざる上原良司のゆかりの地を訪ねるためだ。

２台の車でまず松本市和田にある、上原家の菩提寺である萬年寺にむかう。戦死した３兄弟、良春・龍男・良司のため父が建てた故郷の山の

上原良司の墓碑（右側）の前で

良司メッセージの碑（生誕地池田町）

白い花崗岩の墓石は、３面にそれぞれの墓碑銘が刻まれて、一族の墓に護られるように静かにたっていた。花をたてお参りをすませ、降り始めた雨の中、安曇野市有明の上原家に向かう。良司の妹清子さんと久しぶりの対面をする。ほぼ実物大の３兄弟の胸像がガラスケースに収められている。父が地元の高名な彫刻家に依頼したものだ。軍帽を目深に被った息子たちの像と、父母はどのような想いで戦後を生きたのか。

慌しく上原家を辞して、池田町のあづみ野池田クラフトパークにある「上原良司の碑」に到着した頃は、傘もはなせない本降りになっていた。有明山から北アルプスまでを見晴るかす地に、２００７年９月２７日建てられたモニュメントは、石のアーチと、上原の略歴、建立の趣意、そして「所感」の一部が刻まれた３面の碑文で構成されている。このモニュメントは上原良司が生まれ育ったここ安曇野の人たちが、彼の思いを伝えるための碑を建てたいと、長年地道な活動を続け、それが周辺に波及し、ついには池田町をうごかし、実現にこぎつけた稀有なものだ。ここでは、「上原良司の灯を守る会」の２人の高山さんと師岡さんが、私たちを待っていてくださり、短いけれど心の通い合う時間と、暖かいコーヒーのおもてなしを受けた。帰り道、私たちが、どうしても見たかった、良司が故郷に別れを告げた乳房橋まで、わざわざ先導してくださった。

全国ネットワークの運営委員の２人は、会議のため松本第一高校でわかれ、私たちは最後の見学地松本深志高校にむかった。上原が通った、旧松本中学時代の気品のある建物がまだそのまま使用されていて、なんと、予告も予約もしていないのに、教頭先生が親切に案内してくださった。立派な建築で、学びの場にふさわしい雰囲気に、全員おもわず嘆声を上げた。

日吉台地下壕を案内する者にとって、上原良司を知ることは、学徒出陣で学園を去り、戦死した学生が多くいること、そして彼らが学んだその大学に軍部が入り、彼らに破滅的な命令をだしたことを、生身の人間を通して知ることだと言えよう。そして上原を通して、戦争に駆り出されたあの頃の何百万、何千万人の心情に、少し近づくことができるような気がする。大雨の中、労を惜しまず案内してくださった上原ゆかりの人びとの優しさが、その仲立ちをしてくれたと、私は思う。

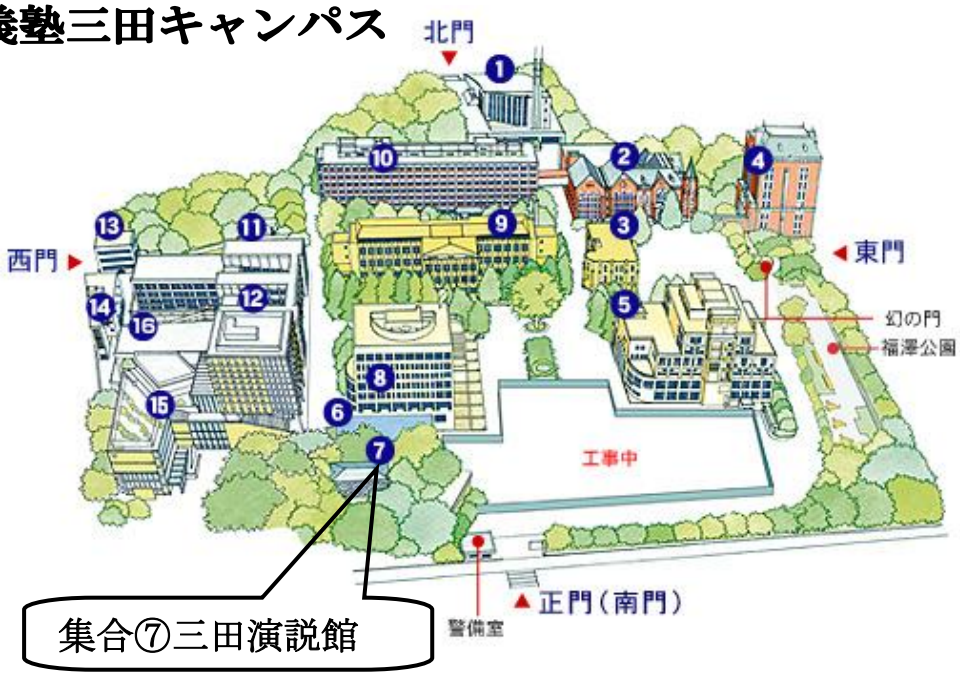
お知らせ

○　第３回　日吉をガイドする講座《慶応大学三田キャンパス歴史散策》

日時　　２００９年１０月１７日（土）　午後１時～３時３０分
場所　　慶応大学三田キャンパス　**（集合場所は三田演説館Ｐ８地図参照）**
講師　　都倉　武之さん　（福澤研究センター専任講師）
内容　（１）講演「概略　福澤諭吉と慶応義塾」
　　慶應義塾についてのレクチャー（三田演説館内で４０分くらいの講義です）
　（２）三田キャンパス史跡めぐり
　　三田演説館（重要文化財　非公開）・ノグチルーム（彫刻家イサムノグチの部屋　非公開）・旧図書館（重要文化財）・福澤諭吉終焉の地・幻の門・平和来の像・還らざる学友の碑・文学の丘など

☆　参加費　無料　　事前申込み　不要　　現地集合です
☆　普段は非公開の三田演説館とノグチルームが見学できます。
☆　地下鉄都営三田線三田駅・JR 山手線田町駅徒歩５分

慶應義塾三田キャンパス



○第１７回　横浜・川崎平和のための戦争展

日程　２００９年１２月５（土）・６日（日）
会場　　川崎市平和館
テーマ　　戦争遺跡を地域の文化財に
代表　　姫田光義　中央大学名誉教授
副代表　　大西　章　日吉台地下壕保存の会会長
　　新井揆博　戦争遺跡全国ネットワーク運営委員
　　渡辺賢二　明治大学講師
顧問　　白井　厚　慶應義塾大学名誉教授
　　須田輪太郎人形劇作家
主催　　川崎・横浜平和のための戦争展実行員会
後援　　（予定）川崎市　　（予定）川崎市教育委員会

○第１７回　川崎・横浜平和のための戦争展　プレイベント

Ａ．日吉台地下壕見学会

日時　　２００９年９月２６日（土）午前９時３０分～１２時
場所　　慶応大学日吉キャンパス
費用　　８００円（保険・資料代ほか）
参加人数　３０人（先着順とさせていただきます）
申込み　　事前申し込みが必要です（申し込みのない方は見学できません）
見学窓口　喜田美登里（T&F　０４５－５６２－０４４３　夜間可）

Ｂ．多摩丘陵の戦争遺跡を訪ねる
～戦争と人権を考えるバスツアー～

日時　　２００９年１０月２５日（日）午前８時２０分～午後５時３０分
コース　東横線日吉駅―小田急線向ヶ丘遊園駅―掩体壕見学（調布飛行場周辺）―

国立ハンセン病資料館（東村山市）―秋津のＢ２９慰霊碑（同）―日立―
航空機立川発動機製作所・変電所跡（東大和市）―向ヶ丘遊園―日吉
費用　２,５００円当日集金します（バスレンタル代・ガソリン代・保険・資料代など）
集合　　東横線日吉駅あるいは小田急線向ヶ丘遊園駅
参加人数　３０名（先着順とさせていただきます）
○申込み方法　葉書かファックスに①②③を明記してください
① 参加者全員の氏名②住所・電話③バスの乗車場所（日吉か向ヶ丘遊園）
○申込み先　〒213-0026 川崎市高津区久末１８８２－３
新井　揆博　０４４－７６６－７８５９
○申込み締切　１０月１６日（金）

Ｃ．登戸研究所資料館内覧会
日時　　２００９年１１月２３日（休）
場所　　明治大学生田キャンパス「明治大学平和教育登戸研究所資料館」
大学祭（生明祭）開催中で誰でも自由に見学ができます
問合せ先　０３－３２９６－２６９４（資料館準備室）

○神奈川県遺跡調査・研究発表会
日　時　１０月１７日（土）
場　所　横浜市歴史博物館
内　容　日吉台地下壕発掘調査　安藤広道氏（慶應義塾大学文学部准教授）
神奈川県考古学会ＨＰ参照（http://www.koukokanagawa.net/）近日中に詳細掲載予定

企画 地下壕ガイドから一言

ドロとゲジゲジ　　山田　譲

去年から新米ガイドをやっています。3 月に会社をサボって（年休です）、藤沢の中学校の見学会のガイドを手伝いました。子どもの集団見学はいつもの定例見学会とだいぶ勝手がちがうものだと思いました。

学校としては平和教育、社会学習としてやっているようで、文部科学省のへんな圧力が強まっている中、先生方もがんばっていらっしゃると思います。

しかし子どもたちの興味･関心は、先生方の教育方針やお気持ちとはちょっと違っていて、というか、別のところにあってそこがなかなかおもしろい。班行動で昼御飯も班ごとだそうだ。「何を食べたの？」と聞くと「マクドナルドで食べた。」と言う。「マックじゃ食べたりないんじゃない？」と聞くと「ハンバーガーとかいろいろ食べるから大丈夫」と言う。私ならカツ丼か中華だなあと食生活の違いを妙に感じたりしてしまう。

さて地下壕の中にはいると大人の見学会とちがって、ものすごく騒々しい。私の担当したクラスの女の子の二人は中にはいった途端、ワーワーギャーギャーさわがしいといったらない。私の説明や注意がみんな聞こえなくなるので「あまり大声を出さないでね」と言ったが全然ダメ。まるきり興奮状態でちょっと手がつけられない感じ。

その女の子たちが作戦室を出てトンネルの中を出口に向かって歩いている時、私に質問してきた。「なんでトンネルの中にドロがあるんですか？」私は少々面食らって「えっ、このコンクリートの壁の向こうは全部ドロなんだよ。」と言うと「ええっ、そうなんですか。」と驚いていた。今の中学生の生活感覚だと地下であれどこであれ、人間が出入りする施設の中に多少でもドロが流れ込んでいるなどというのは見たこともないのだろう。

ところで寒い季節の見学会では地下壕は外よりも暖かく、そのせいかゲジゲジが壁にたくさんへばりついている。子どもたちは地下壕にはいって奥に向かっていくときは緊張している

せいか、ゲジゲジには全く気がつかない。しかし帰りの時に私が懐中電灯で照らしてみせると、気がついて「ワーッ、へんな虫がいる」と騒ぐ。「これはゲジゲジだよ。おとなしいから何もしない。大丈夫だよ。」と言うと、ちょっと勇気のある男の子がそっとさわってみたりする。ゲジゲジはびっくりしてモゾモゾと動きだす。それでまた子どもたちがワーッと言って騒ぐ。私は「来るときは全然気がつかなかっただろ。こんな風に気がつかずに通りすぎてしまうことってけっこうあるもんだよ。おじさんに言われて君は気がついたけどそれで君が他の子に言ってみんなも気がついた。気がついた人がみんなに伝えていくことも大事なことさ。」とえらそうに言うと、男の子は「フーン」と何やら納得したような顔をした。子ども相手の見学会もなかなかおもしろいものです。

また、地下壕の中に「水洗便所がある」と言っても子ども相手だと話が通じない。今の子どもは水洗便所以外の便所を知らないし使ったことも無いということを、あらためて気づかされました。妙な発見がいろいろあるものです。つまらなそうな顔をしている子もいるけど、私が話しかけるとたいがいは元気に受け答えしてきます。私のような年配の男と話をする機会は少ないはずですが、子どもたちにとってはそれが逆に新鮮だったりするのかもしれません。

ところでその日に藤沢市の子どもたちも見学した川崎平和館の展示にたいして、川崎市の三宅議員が昨年９月 30 日に川崎市議会決算審査特別委員会でびっくりするような質問をしたそうです。「『中国との 15 年戦争』という記述」は「正しくありません」（実際の展示では「足掛け 15 年」）。「東条英機元首相を主戦論者として断定」しているが「東条内閣は最後まで平和交渉を行ってきたことは明らか」で、「訂正いただきたい」などです。

さらに、平和館の運営委員についても「偏向したイデオロギー」の人が選定されているとして「運営委員の選定をもう一度改めるべきだ」と市側にせまりました。私も川崎市民のひとりなので、「気がついた人はみんなに伝えることが大事」と思い、申し添えます。

寄稿　　**修学旅行の中学生の地下壕見学感想文**

Ａ．愛知県豊田市立下山中学校　３年　　（5 月 18 日　90 名）

先日はめったに入ることのできない戦争中に指示をした地下壕に僕たちを入れてくださり、ありがとうございます。僕は歴史にはとても興味や関心があったけど、その中でも戦争のところは一番興味があったので、地下壕に入ることは今回の修学旅行の中での１つの楽しみでもありました。でも実際に行ってみると、そこはとてもすごいところで楽しむところではなく、ただただ心の中がいたくなるようなものでした。説明を聞いているときはまるで、そこにいた人が実際にいるような感じでした。色々説明をしてくださって、また歴史の中の戦争について興味が高まりました。

下山中学校

Ｂ．京都府京都市立下鴨中学校　３年　　（6 月 1 日　190 名　）

先日は、修学旅行の平和学習の１つとしてお伺いし、たくさんの貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

今までも、広島の原爆資料館などを訪れたことなどありましたが、今回は当時のままの様子ということで、展示館などとは違った雰囲気での学習だったのですごく緊張しました。海軍の人々が通ったのと同じ道を１歩１歩進み「この日吉も大きな意味で戦場だった」という言葉をかみしめました。作戦室や通信室は昔の様子が想像でき、怖くなりました。保存会の皆様が大切に伝えていこうと努力されているものにふれ、私の中で確かに何かが変わった気がしています。小さなことから“平和”について考え、少しでも行動にうつしていけるよう、がんばりたいです。

交流会

☆南房総・平和をつくる会

９月２日、千葉県南房総市の戦争遺跡保存団体 17 名が地下壕見学に来られました。2006 年に活動を始められた南房総・平和をつくる会（代表　八木直樹さん）の皆さんです。

2004 年に保存の会でも見学したことのある、三芳村下滝田基地跡（丘陵畑地の特攻機“桜花”カタパルト発射台）や砲台跡などの保存・活用に取り組まれています。

地下壕見学の後、慶応ﾌｧｶﾙﾃｨﾗｳﾝｼﾞで昼食をとり、来往舎会議室で大西会長をはじめ 7 名が参加して 2 時間ほどの交流会を持ち、戦争遺跡の草刈りや展示・学習会・講演会、南房総市市民提案型まちづくりチャレンジ事業助成金事業「歴史を活かした平和なまちづくりプロジェクト」など活動のお話を伺いました。平和をつくる会の皆さんの誠実な取り組みに心をうたれました。交流の短さを残念に思いながら、帰りのバスを見送りました。

本を頂きました

○ビッグイシュー

「ホームレスの仕事をつくり自立を応援する」雑誌　ビッグイシューが特集“戦争を終わらせる　ー戦争遺跡を市民文化財にするー”を 124 号に掲載しました。日吉台地下壕も紹介されています。

○『昭和史の大河を往く第八集
本土決戦幻想　コロネット作戦編　保阪正康』毎日新聞社

「サンデー毎日」に連載されたもので、「第七集　オリンピック作戦編」に続くもの。

保阪正康さんは、昨年１０月に日吉台地下壕に取材に来られ、川崎市の大師高校生と共に地下壕見学に参加、高校生にお話もして下さいました。連合艦隊司令部については 2 章に亘り掲載されています。

☆活動の記録　　（２００９年６月～９月）

６／１９　運営委員会　会報９３号発送（慶応高校物理教室）

６／２０　第２回日吉をガイドする講座　「日吉台とその周辺の遺跡」講演・遺跡探訪ツァー
桜井準也先生（尚美学園大学政策学部）
慶応日吉ｷｬﾝﾊﾟｽ来往舎大会議室・
日吉ｷｬﾝﾊﾟｽ～観音松古墳跡～夢見ヶ崎（加瀬山古墳群）

桜井準也先生（尚美学園大学政策学部）

６／２１　横浜大空襲を記録する会との合同研究会（菊名ハイツ）

６／２３　地下壕見学会　慶応大学日本政治運動史Ⅱ（都倉先生）・慶応塾生新聞　15 名
６／２６　地下壕見学会　緑区横浜線物語　32 名
６／２７　定例見学会　ビッグイシュー取材　52 名　　地下壕ガイド学習会
６／３０　地下壕見学会　千葉県館山市公民館　30 名
７／３　地下壕見学会　日吉郷土史会　42 名
７／６　日吉地区センター区政７０周年自主事業「わがまち再発見」連続講座①〔日吉の空襲を聞く〕講師　茂呂秀宏運営委員　（日吉地区センター）
７／８　地下壕見学会　港北区小学校社会科部会　19 名
７／９　地下壕見学会　港北二水会　17 名　　運営委員会（慶応高校物理教室）
７／１３　地下壕見学会　日吉地区センター「わがまち再発見連続講座」②　20 名
７／１８　地下壕ガイド学習会（菊名ハイツ）
７／２４　地下壕見学会　関西学院大学ＯＢ　36 名
７／２５　定例見学会　48 名
７／３１　地下壕見学会　横浜市人権教育研究会　52 名
８／１　夏休み見学会（午前・午後）73 名　（中学生 6 名）
８／４　夏休み見学会（午前・午後）114 名（小学生 14 名・中学生 25 名・高校生 15 名）
８／６　地下壕見学会　昭島市役所　62 名
８／７～１０　第１３回戦争遺跡保存全国ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ松本大会（松本第一高校）
　７日　ﾌﾟﾚﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ　８日　総会・記念講演・特別講演・交流会
　９日　分科会　　１０日　ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ　松本市の戦争遺跡
８／１４　地下壕ガイド学習会（菊名ハイツ）
８／１７　地下壕見学会　神奈川県高校教職員組合　15 名
８／２８　地下壕見学会　青山学院大学　8 名
８／２９　定例見学会　37 名
９／１　平和のための戦争展実行委員会（法政第二高校教育研究所）
９／２　地下壕見学会　南房総・平和をつくる会　17 名　見学後交流会（来往舎会議室）
９／１１　地下壕見学会　早稲田大学新宿稲門会　15 名

☆予　定
９／１５　運営委員会　会報９３号発送（慶応高校物理教室）
１０／１０　ヒヨシフェスタに参加（ヒヨシエイジ主催　慶応日吉ｷｬﾝﾊﾟｽ 12 時～16 時）
「ヒヨシエイジ」への参加も３年目になります。保存の会は来往舎前で展示・書籍販売の予定です。大学と地域が交流する楽しい企画です。（野菜販売や DVD 上映会等）

☆☆定例見学会（土曜日　１３：００～）
９／２６（９：３０・１３：００の２回　　午前は平和のための戦争展ﾌﾟﾚｲﾍﾞﾝﾄとして）
１０／２４　・　１１／７　・　１２／１９

連絡先（会計）亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15　℡ 045-561-2758
（見学会・その他）喜田美登里：横浜市港北区下田町 2-1-33　℡ 045-562-0443
ホームページ・アドレス：http://hiyoshidai-chikagou.net/　（新アドレス）

日吉台地下壕保存の会会報　　（年会費）一口千円以上
発行　日吉台地下壕保存の会　郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表　大西章　　（加入者名）日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会